

特集

昨今の離婚増加に伴って、母子家庭もまた増えてます。働きながら一人子育てをするのは、容易ではありません。しかも昔よりは母子家庭に対する偏見が減ったとはいえ、まだまだ周囲の風当たりが強いのが現状です。今回の特集では、そうした母子家庭支援について考えてみました。



「母子家庭支援」を考える

100万にも及ぶ母子世帯

昭和20年代、戦争未亡人対策がとられ、その後は緩やかに母子家庭は減っていきましたが、ここへきて離婚の急増により母子家庭も増え、その支援策が多面で検討されています。現状はどうなっているのでしょうか。

子どものいる世帯のうち1人現世帯は約10%

離婚件数は平成13年に約29万件と、過去最高を記録しました。離婚率も2.27（人口1000対）で過去最高です。ちなみに結婚件数は、平成13年に80万件。単純比較はできませんが、離婚件数は結婚件数の3分の1以上を占めることになります。

子どもがいての離婚は約60%、そのうち母子家庭は約80%にも上るそうです。母子世帯数は、平成10年で約95万世帯、そのうち離婚によるものは約7割となっています。世帯でみると、1人親世帯が子どものいる世帯の10%に達しようとしています。特に都心部では顕著で、保育所にいる子どもの4分の1から3分の1が1人親家庭というところも。

いずれも、結婚件数が増えていないなかでのことなので、事態の深刻さに各関係部署や団体は支援策を模索しています。

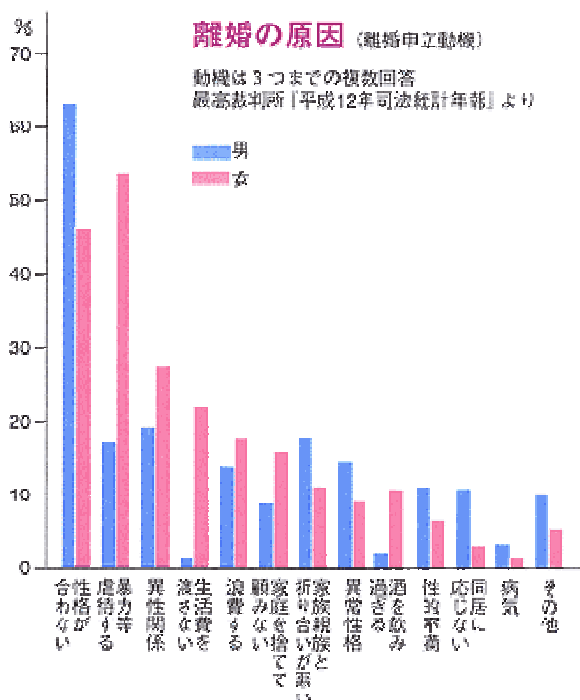
就労状況の悪さに加え養育費の未払いも

離婚の原因はさまざまですが、グラフにあるように、暴力などの虐待の多さが目を引きます。夫の暴力によって心身ともに傷つき、仕方なく離婚、そして働きながら子育てをする—という、1人で悩み、苦しむ母親の姿が見てとれます。

しかも、母子家庭の母親の就労状況には厳しいものがあります。働いている人のうち、常用雇用は半数ぐらいしかなく、約40%は。パートで生計を立てています。また、一般世帯の平均年収が約658万円あるのに対して、母子家庭はわずかに約229万円。一般世帯の3分の1の収入しかなく、ぎりぎりの生活を余儀なくされているのです。

収入の問題はほかにもあります。それは養育費が支払われていないケースが多いこと。養育費について取り決めをしている割合はわずか約35%、現在も養育費を受給している割合は、約21%にしか過ぎません。

こういった悪条件のなかで頑張っている母子家庭を、もっとみんなで真剣に考え、支援していきませんか。



児童館で母子家庭の交流会

子育ては一大事業です。ましてや女手ひとつで子どもを育てるとなれば、それは大変なことです。そこで必要となってくるのが“地域の力”です。東京で母子家庭向けの集いが開かれたと聞き、取材に行ってきました。

楽しそうな笑顔と弾んだ歓声に包まれて

爽やかな春風の吹く日曜日の朝、母子家庭の親子が練馬区立上石神井児童館に次々と集まってきます。

今日は、練馬区母子寡婦福祉連合会（母子会）の会員家族を対象にした「春を呼ぶ出逢いのつどい」の日。最初はちょっぴり緊張気味だった30数組の親子たちも、時間とともにリラックスし、楽しそうな笑顔を見せ、弾んだ歓声をあげるようになりました。



プログラムは、自己紹介ゲーム、ウォークラリー、そして昼食をはさんで、子どもたちはビンゴゲーム、親たちは座談会へ。合わせて4時間にも及ぶ交流会でしたが、あっという間に時間が過ぎてしまいました。



自己紹介ゲームでは、児童館職員のリードで誕生月で集まったり、太鼓の数で集まったりしてゲームが進められます。子ども同士も親同士も、すぐに打ち解けていきました。

ウォークラリーは、お手玉、ベーゴマ、百人一首などの昔懐かしい遊びや、将棋、ペンシルパルーンを使っのチャンバラ、皿回しなど、8つのコーナーを巡ってスタンプを押してもらいます。子どもたちはもちろんのこと、親たちも童心に帰って遊びました。

2時間遊んだあとは、けんちん汁とお弁当の昼食。けんちん汁の具の野菜は、前夜子どもたちが刻んできたものです。そして、子どもたちは遊戯室で楽しいビンゴゲーム、親たちは車座になったの座談会で、民生児童委員や厚生労働省の職員と活発な意見交換を行いました。

母子家庭の母親たちが胸の内を話せる場を

館長の関洋さんは、こう言います。

「母子家庭のお母さんたちも、言うに言われぬ苦労や悩みを抱えています。それなのに、なかなか話せる相手もチャンスもないのです。同じ悩みや思いを話せる場が是非とも必要だと、思ってきました。」

そんな昨年の暮れ、厚生労働省で東京都母子寡婦福祉協議会（上部組織は財団法人全国母子寡婦福祉団体協議会）との集まりがもたれ、

「育児と家事を代わってくれる人がいないので、毎日が緊張と疲労の連続」「同じ思いの人たちが、むなしさやつらさを語り合い、一緒に乗り越えられるような交流の場がほしい」などの声が母子会から出されたことを受けて、とんとん拍子で今回の交流会が開かれることになったのです。

「子育て支援に何を望むか、との主婦への区の意識調査の結果、(1)育児への手当てが欲しい、(2)夜間や休日に診てもらえる医者が欲しい、(3)子どもを一時預かって欲しい、(4)お母さんたちの交流の場が欲しい、(5)気軽に相談できる場が欲しい、の5つが挙げられました。母子家庭は、なお切実に必要なのではないかと感じていましたので、当館の日曜開放を母子会に活用していただけると決ったときは、とてもうれしく思いました。」

そうして「春を呼ぶ出逢いのつどい」は、母子会の今後の自主的な児童館開放利用へのきっかけづくりと、遊びと交流の場の設定を通じて今後の母子家庭への支援の模索、そして地域の人々に母子会や母子家庭を理解してもらうために開かれました。



自立支援のパソコン講習会を

「春を呼ぶ出逢いのつどい」に参加したお母さんたちは、「このような交流会を、ぜひまた開いてください」



「今日、この会に集えてよかったです」「私も子どもも、お友達ができました」など、晴晴とした表情で口々に話していたそうです。

そしてまた、「就労できるようにしてほしい。自分で働いて生きていく手助けをしてほしい」という声も多く聞かれました。

お金をもらって生きていくのではなく、自分の力で子どもたちと生きていきたい、という思いに共鳴した上石神井児童館では、何か技術を習得する講習会を、と働きかけた結果、地元の青少年育成委員の方の好意によって、パソコン１０台と実習室が格安で借りられることになりました。

「場所も当児童館のすぐそばですので、『パソコン実習と児童館での集団遊び』なんていう、面白い企画もできそうです。これからも母子会と密に話し合っ、もっと支援できればと思っています」

このような地域での取り組みが、全国に広がるといいですね。

以上 女性誌「りぶる」(2002年9月号)

